

ドリアン助川氏の映画と講演 in 東海

英語科 西村尚登

ドリアン助川氏は、本校を卒業後、早稲田大学第一文学部東洋哲学科に進学し、同大学を卒業、また、日本菓子専門学校通信課程を卒業されました（それが今回の映画の伏線にあるような気もしますが、穿ち過ぎでしょうか）。彼はわたしが東海に就職したときの高校2年生で、その彼が高校3年生の記念祭の時に、わたしの担当していた音楽祭で、電気系統のトラブルから暴動が起きそうな不穏な雰囲気超満員の講堂に漂ったときに、彼がさっと舞台上に登場し、その持つ独特の雰囲気でその場を仕切り、殺気立つ群衆を鎮めてくれました。本当に彼には助けられました。その後、**ドリアン助川**の名で1990年「**叫ぶ詩人の会**」を結成。その当時わたしは東海父母懇の教員代表でしたが、10人の県会議員の来られる私学のオータムフェスティバルが東海で大規模に開催されることになり、メインゲストの一人として駆けつけてくれました。このように、彼には節目々々に助けられてきました。今年もわたしの最後の年に東海で主催される東オータムフェスティバルのメインゲストとして登場してくれます。今回は小説家としての顔で、自作の小説「あん」を原作とした映画の上映会とそれにまつわる「物語『あん』に込めた生きることの意味」という解題の講演をしてくれます。激しい情熱を秘めた助川から静かに表現された「映画」と静かに語られる「講演」が非常に楽しみです。

「あん」という映画は、たとえばハリウッド映画などとは対極にある、静かに語られる映画です。「あん」というのは人の名前ではなく、「餡子」の「あん」なのです。ハンセン病の患者であった樹木希林が、ある街角で開店した「どら焼き」屋の兄ちゃん（永瀬正敏）の作る餡子に飽き足らず、おずおずとお手伝いしましょうかと申し出るところから物語が始まります。そのどら焼きが大当たりをするのですが、心無い中傷で…という切ない結末を迎える映画です。静謐な場面、声高なところのない言葉のやり取り。樹木希林の孫娘が出演していますが、とても雰囲気のある古風なチャーミングな女の子。あの独特の個性を持つ市原悦子も登場します。見逃せない映画です。見てよかったと思える数少ない映画です。パリでもウィーンでも好評を得て上映中で、助川君も世界を飛び回って講演をしサイン会が開かれています。今回は彼の特別の計らいで東海高校の講堂で、この東オータムで上映されます。ぜひお見逃しなく。

名前の由来

放送作家時代は本名の助川哲也、この名での著作もある。叫ぶ詩人の会結成後に威圧感を与えがちな自らの風貌を自虐的に捉え、ドリアン助川の名を使うようになる。2000年春、活動の拠点をニューヨークに移したことを機に新たに第2の筆名を明川哲也としたが、再び「ドリアン助川」の名前で活躍している。

小説「あん」とその映画



—— ドリアンさんの小説が原作となった映画「あん」、公開初日は大変な盛況だったとうかがいました。おめでとうございます！ まずは、河瀬直美監督の映画をみての感想をお聞かせください。

映画ですから本の内容をすべて描ききるといのは難しいでしょうし、違うものになるんだろうなと思っていました。ところがですね、本にあるシーンでカットされた部分などは多々あるんですけども、**見終わったあとに、根っこが寸分たがわず、同じだと思った。**映画と原作は違って当たり前なんですけど、違わなかったんです。河瀬さんが本当になんども原作を読み返して下さって、根にあるものをしっかり体に入れてくださった。ですから、物語の展開が違ってても、根が全くいっしょだった。そこに僕は激しく感動したし、感謝の気持ちしか湧いてこない。それを日本中の人に見てもらえることも大変な驚きなんですけれども、河瀬さんの映画が国を超えてひろがりつつあって、原作者としては奇跡の日々にいるような（笑）、そういう感じですね。

—— 海外でも次々と公開が決まっているようですね。

現段階で、35カ国、「南極をのぞく（笑）すべての大陸」とうかがっています。

—— ドリアンさんの「あん」は、東京の全生園のハンセン病の元患者さんたちとの交流から生まれたのですよね。今回、小説を書かれるにあたって、ずっとお話を聞かせていただいて、さまざまな協力をしてくださった森元さんご夫妻といっしょに、カンヌに行かれましたね。

まず森元さんに喜んでもらいたいというがありました。もっといえば、徳江のモデルともいえる鹿児島の上野正子さんや、元患者の方々ですね。元患者の皆さんが、この本をどんなふうにご読んでくださるのか。本には、病気について、顔の形が変わったりとか、指が曲ってしまったりといった表現があります。実際に病を体験をされた方々はどうか。最後までときどきしました。でも、ちょっと失礼にあたるかもしれないけれども、結果的には**患者目線ではない人間がその世界を書く、そういう人間が現れたことを喜んでいただけたら、うれしいな**と思っただけです。森元さんも片目が不自由でしたから、読んでいただくのに時間がかかりましたけれども、知人を通じて本の感想をいただいたときには、ほっとしました。この人は本当に外部の人間なのか？ どうしてこんなにも自分たちの気持ちができるんだって。大きな宿題をやりとげたような気持ちでした。

それから「ラジオドラマになりましたよ」とか、「読者を連れて全生園に行きます」などのご報告するたびに、森元さんはそのひとつひとつにうきうきと弾むような反応をくださいました。そして、「**夢物語ですけれども、映画化されて、しかも外国の映画祭なんかに行く日が来たら、いっしょに行きましょうね**」って、約束していたんです。それはもう、究極の夢物語としてですが。ですから、これはいっしょにその物語をつくってくださった元患者さんたちの魂を、その究極の夢物語にのせて引っ張って行けたら、とても幸せなことだなんて思っていたんですね。お会いするたびに、「行きましょうね、そのときまで健康でいてくださいね」って言ってましたし、河瀬さんにも、「ほんとうにそうになったら森元さんと行きますよ！」って伝えていました。

でもまあ、約束事ではあったけれども、まさかほんとうにそうなるとは！ **カンヌ国際映画祭（「ある視点」部門の開幕作品）に行くことになってしまった**。だから、ほんとうに「ああ、生きている間にこんなことって起きるんだなあ」って。カンヌにご一緒させていただき、**車椅子を押したりもしたんですが、その車椅子の重みもうれしい**ですね。扱いがわかってなくて、成田ではブレーキかけたまま押してしまっただけで、やたら重いなって（笑）。でも、その重みさえうれしい。それはもう、**作家である以前に、人として幸せ**でした。カンヌ映画祭の式典はドレスコードもあるので、いっしょにタキシードも買いに行きました。各駅停車でイタリアまで足をのばしたりと、そういうことができ、とてもよかったです。



Photographed by LESLIE KEE



—— 名前がもつ意味は、実は「あん」という小説のなかでも語られていますね。ハンセン病の元患者の方々は、本名を捨てることを強いられたのですよね。

これは完成した本には載せませんでしたけど、徳江さんの本当の名前は別の名前なんですよね。吉井あん、なんですよ。それはやりすぎだと思ってやめましたけれども。名前を変えられてしまった人たち。いまだにその名前を名のっていらっしゃる方もいます。過去の名前に戻した方もいます。それぞれの格闘の仕方、それはいろいろなんですけども。僕は本名と、ペンネームのドリアン助川と、それから第二ペンネームの明川哲也と名前を3つ持った経験があるので感じるんですが、名前ってというのは、どこかでその人の生き方の、根の張り方のようなものを規定していく要素があるかもしれません。ドリアンなんていう名前は、文芸作家としてはよくないよ、なんて言われますが、よくないもなにも、おれもう、ドリアンだから。しょうがないな、それは。

—— ドリアンさんにとって、「物語」とは何でしょうか？

今回カンヌに行った折に、以前、英国の雑誌に短篇の翻訳がのったとき、そのたった一話だけを読んでファンになってくださった方が会いに来てくださったんです。イタリアの田舎から車で4時間もかけて、ワインもって。物語を書くっていうのは、こんなにすごいことなんだなって、あらためて思いました。何年もかけて世に出したものが、その間、編集者にもおつきあいいただいているのに、初版止まりということが続くと、時には無意味なことをやっているのかと思うこともあるんですよ。この事務所ですらひとり山椒魚みたいだなってね。だけど、そういうことが一回でもあると、そうじゃないって思える。何語だっていい。物語をつづるということは、自分の人生独自の資産なんだと感じ始めています。